

カルチャー・ショック 外国人のみた日本



安 泰慶
出身地：韓国
所属：韓国対外経済政策研究院知識情報室副研究員
日本滞在：2008年7月～12月

「枠組み」の理解

安 泰慶

私は図書館情報学を専攻した。情報関連書籍を読んでいると、「枠組み」という言葉をよく見かけるが、韓国語に訳すと「構造化」になる。しかし東京で生活しながら「枠組み」には「構造化」よりも、はるかに多くの意味があることに気づいた。日本生活の中で体験し、覚えた「枠組み」について個人的理解を付け加えて書いてみる。

東京生活で最初に目に触れたのは、二、三分ごとに正確に到着する、電車の運行間隔だった。もちろん、日本の電車の運行時間が徹底的に守られていることは聞いていたが、これほど正確だとは思わなかった。電車に乗ってふと思ったことは、電車に乗る各階各層の人々が皆、まるで名札をつけているようだということだ。会社員は例外なく黒いスーツを着ていて、中高生は当たり前だけ制服を、小学生の場合、制服はもちろん、帽子とランドセル、補助かばんまで「徹底的」に備えていた。皆が皆、かばんを持っているところが私としては不思議でもあり、怪訝でもあった。後に体験を通じて知ったことだが、彼らのかばんの中には飲み物と本、傘、お弁当などが入っている。

「幽霊電車」。これは私が日本の電車につ

けたあだ名だ。朝の電車は通勤する人々で大騒ぎだ。しかし皆、口を噤んでいて、携帯電話のベルの音さえ聞こえない。ほとんどの人が縦書きの本や新聞（韓国では現在、横書きが基本）を読んでいる、そうでなければ静かに考え込んでいるように見える。このような日本人の習性は公共意識から由来するのではないかと、注意深く考えてみる。対話を遠慮するのはもちろん、携帯電話のベルも鳴らさないのは、他人のために自分の不便を受け入れるという、極めて「利他的」な習性なのだ。彼らを見て、ただ不思議に思うのではなく、「枠組み」の型に定型化されているのではないかと思えた。

もう一つ、韓国と違うところは、日本は常に自然災害の脅威にさらされているということだ。日本人はいつ起こるかかわらない地震と、毎年、夏になると日本列島を通り過ぎていく台風のような気象変化にむき出しにされている。このような脅威に備えるため、昔から正確な知識を蓄積してきたのではないか。このようなことから、それらの知識を道具化し、行動と様式の型を決めたのではないかと思われる。「枠組み」を「構造化」の中に完璧性、透明性、信頼性、公益性などが溶け込んでいるものだと理解したのなら、これは日本を観察する外

国人の観点において拡大解釈したのかもしれない。

東京では、どこに行っても道に迷うことはない。私のような外国人にもわかりやすく案内図がいたるところに（必要などころに）設置されている。これは、自分がいる場所がよくわからない場合にたいへん役に立つ。このように他人に対する日本人の理解と配慮に敬意を表する。日本は開港によって西欧の制度や文化と物を早くから受け入れた。同時に、外国の多様性までも受け容れているように見える。一方、日本人は「枠組み」にかなり隷属しているのではないかという面もある。はたして先進国日本がどこに向かっていくのかを、「親切的案内図」を通じて反芻して見る必要があるのではないか。案内図にはその答えがあるのではないかと思う。

（前海外短期訪問研究者／訳）二階宏之